特集

直近の経営課題を把握して
早急に手を打つ！

社長と経理が知っておきたい!!

「月次決算書」の正しい読み方&活かし方

皆さんの会社では月次決算を行なっているでしょうか？　月次決算の目的は最新の経営状況を迅速に把握することにあります。そのためスピード感を持って作成することが求められます。そしてもうひとつのポイントは、迅速に作成した月次決算書の読み方を理解しておくことです。月次決算書は年次決算書とは目的も内容も異なります。その違いを理解して「月次決算書」を正しく読むことが大切なのです。今月の特集企画では「月次決算書の正しい読み方＆活かし方」を専門家がレクチャーします。

税理士法人古田土会計取締役／税理士　川名 徹

LESSON ❶

まずは月次決算の大切さを理解しておこう

月次決算の４つのメリットとは

中小企業にとって月次決算は経営の羅針盤とも言える重要なツールです。月次決算書を毎月作成し、分析することで、経営者は会社の現状を正確に把握し、適切な意思決定を行なうことができます。

古田土会計グループでは約４０００社の顧問先があり、年商５０００万円～50億円の規模の中小企業の月次決算のお手伝いをしています。月次決算書を使いながら毎月数字の説明をすることで、多くの経営者、経理の方が数字に強くなり、数字で経営判断ができるようになっています。

本稿では、月次決算書をどう作り、どのように活用すれば良いのかを解説していきますが、その前に「月次決算がなぜ大切なのか」についてお話ししておきましょう。

世の中には月次決算書を作らず、本決算の時にだけ数字をまとめ、慌てて税務申告をしている会社も多くあります。義務として年に1回の決算書だけ作れば誰からも文句を言われることはありませんが、それでは自社の現状を適切に把握することが難しく、感覚に頼った経営になってしまいます。

月次決算を行なうことで、以下の効果を得ることができます。

1. 早い経営判断ができる

月次決算を行なうことで、期の途中でもリアルタイムに業績を捉えることができます。感覚ではなく数字で把握することによって、当月から素早く対策が打てるようになります。

本決算による決算書は、通常、決算月から約2ヵ月後に出来上がります。ですから、年に1回、ようやく決算書が出来上がってから1年分の数字を確認・分析しているようでは、経営という観点ではもはや手遅れです。半年や四半期に1回、数字をまとめている会社もあると思いますが、市場の変化に迅速に対応するために、中小企業であ

っても最低1ヵ月に1回、数字をまとめる月次決算に取り組むべきです。

2. 資金繰りが安定する

月次決算を通じて現金の流れを把握することで、資金繰りの安定が図れます。毎月のキャッシュフローを確認し、必要な資金を予測することで、資金不足に陥るリスクを回避できます。また、将来の投資や大きな支出を計画する際にも、直近の月次決算のデータを参考にすることで、より正確な判断ができます。

また、今期の納税額も早い段階でシミュレーションできますので、多額の納税額が発生することがわかれば、納税資金としての借入や資金繰りの対策についても打てる手が格段に多くなります。

3. 計画に対する進捗の確認ができる

月次決算を行なうことで、計画に対して適切に進捗を把握することができます。

計画の達成度合いによって部門ごとの評価や賞与の支給基準も社員に明確に示すことができるようになりますので、透明性のある経営姿勢を示すことができ、全社員の士気の向上や一体感を作ることに繋がります。

4. 対外的な信頼が得られる

定期的な月次決算の導入は、取引先や金融機関からの信頼を得ることにつながります。単純に早く数字を報告できるというメリットだけではなく、経営者が財務状況を感覚ではなく、常に数字で理解しているという安心感を持ってもらうことができるからです。

例えば金融機関としてお金を貸す側の立場になれば、会社の現状を説明するのに1年前の決算書や半年前の試算表を使って説明する会社と、先月の結果を毎月数字で報告できる会社では、どちらを信頼してお金を貸したいかは明確です。

月次決算は単なる書類作成に留まらず、企業の健全な経営を支える基盤になるのです。

月次決算書＝管理会計であることを押さえておく

月次決算の大切さを確認したうえで、もう一点押さえておきたいことがあります。それは、月次決算書では、「管理会計」の手法を取り入れることが大切だという点です。

月次決算書のベースとなるのは試算表です。ただし、「試算表を作っている＝月次決算をしている」ということ